



2022 年度ガイドクラブ「茶話会」(7/22) 報告

◆◆◆近鉄生駒駅徒歩3分のところにある「アトリエ&カフェ Luana」にて、ガイドクラブ茶話会が開催されました。会員の中西ツヤ子さんのフランス在住の娘さんご夫妻(さおりさんとイヴァンさん)が、コロナ後に久しぶりに帰省されることになり、双子の息子さんとともにゲストにお迎えして、フランスでの生活やコロナの状況などについて、お話を伺いました。参加者のみなさんの質問にひとつひとつ丁寧に答えてくださるさおりさん、おっとりしながらしっかりと家族を支えるイヴァンさん、小1の「やんちゃかわいい」栄汰君と勇梧君、そしてお母様のツヤ子さん、仲睦まじいご一家の様子がとても微笑ましかったです。写真撮影後、日本の「チーズ」にあたる言葉はフランスにはないの？と尋ねたら、すぐさま二人の可愛い「親善大使」が元気よく「ウィスティティ！」と教えてくれました。Oustiti とは小さなお猿さんのことだそうです、さっそく使ってみたくまりました。(浅井直子)

◆◆◆イヴァン・オラリアガさんは、映画、アニメ、TV ドラマなどの外国語作品をフランス語に翻訳し、それを声優さんたちのセリフに作りなおしていく「吹き替え作家」である。異なる言語の意味を変えずに俳優の唇の動きに合わせて翻訳するという難しい作業であるが、言語にかかわる仕事の楽しさや、充実感も十分に体験しておられると感じた。一方、奥様の中西さおりさんは、フランスで日本語教師として活躍しておられる。外国企業も多く、多言語教育が盛んであるパリ西方のデファンス地区にある学校で、週に 45 分授業を 4 回こなし、年中行事など日本文化の紹介もしておられる。双子の小学生の男の子のお母さんでもあり、フランスの教育事情も毎日の生活ぶりもたっぴりと伺うことが出来た。参加者からは様々な質問が飛び出したが、的確な応答をされ、頭がよく言語力のある方だと感心した。子供たちのバイリンガル教育に関しては、意識的に取り組まないと中途半端になる可能性があると言われたのには、体験に即した説得力があった。(長谷川明子)

◆◆◆今、ヨーロッパでは異常気象のため連日 40 度を超える暑さで火事や熱中症で亡くなる方がいると報道されています。フランスでは、公共施設にはクーラーが設置されているのですが、一般家庭や学校にはなく、ただひたすら雨戸を締め切って、扇風機をかけて我慢ということです。日本ではコロナの中、夏は熱中症も心配ということで、設置率の



低い自治体は頑張っていて、一昨年から学校にクーラーの取り付けが始まりました。バイリンガルについては、国際結婚をしている方の子どもは環境が整っていて、うらやましいなあと言われているようですが、フランスで暮らし、子どもたちが学校で習い、母親が日本語で話していても、日本語は不完全になってしまうので、家庭でのサポートは必要ということでした。(藺田章恵)

◆◆◆7月22日はお集まり頂きありがとうございました。「普段のフランスでの生活や仕事のことなど気軽にお話しください」とのことでしたが、皆様にとって興味のある話ができたかどうか自信がありませんが、皆様の温かい眼差しに守られ、何とか私たちの日頃の生活をお伝えできたのではないかと感じております。渡仏して 15 年目を迎えました、コロナも体験し日本とフランスの生活の違いを実感しつつ、それぞれの国の良い点をうまく組み合わせながら生活できたらと思う毎日です。今回、



奈良でフランスの映画や文化に興味のある皆様や、フランスと繋がりのある皆様にお会いできた事、大変嬉しく思います。お招きありがとうございました！(中西さおり)

Je vous remercie encore pour votre accueil et ces échanges instructifs. J'ai eu beaucoup de plaisir à partager ce moment avec vous, et j'espère qu'il en a été de même pour vous. Je souhaite une longue et heureuse continuation à votre association. この度はお招き頂き、情報交換の場を設けてくださった事に改めて感謝致します。この時間を皆さんと共有できたことに喜びを感じています。奈良日仏協会の益々の発展をお祈り申し上げます。(Ivan OLARIAGA)

美術クラブ第5回例会（6/10）レポート「エコール・ド・パリの画家たち」

◆◆◆待ちに待った美術クラブの鑑賞会。鑑賞会としては、3年ぶりの開催で、今年2月に新しく開館した大阪中之島美術館の「モディリアーニ」展に、21名（会員14名、一般7名）が参加しました。南城さんの事前の解説が的確で、目から鱗が落ちることしきり。展覧会で確認したこと、あとで家でネットを見ているいろいろ調べたのと合わせて、私なりに理解したことは以下の2点。①モディリアーニの絵の人物像が西洋美術の長い潮流にあること。ギリシア以前のキクラデス文明の卵型の造型→シエナ派の首を傾げた細長い顔の人物像→ピカソ、ブランクーシなどプリミティヴな表現。②近代になり王侯貴族からの注文がなくなったことで、画家たちは売れる当てのない絵を必死で描くようになり、強烈な個性を武器にし、のぎを削るようになった。それで隣に來たらとてもお付き合いできないようなとんでもない人たちが繰り広げる狂乱の時代となったこと。それにしても、モディリアーニの絵は見れば見るほど、人物の表情の愛らしさが増してくるように感じられます。南城さんによれば、シエナ派の抒情的な感性の影響があるとのこと。一度シエナ派の絵をじっくりと見てみたいと思いました。（杉谷健治）

◆◆◆私は約50年前、モディリアーニの肖像画に、瞳のあるものと、ないものが存在することに気づいた。その数年後、統合失調症についての精神医学の授業で、この疾患における幻覚は、幻聴のみで幻視がないことを知った。その後、サルトルの視線（le regard）に関する現象学的研究を通して、統合失調症の患者が、他者の視線に対して、メドゥーサの視線のように怯えていることを知った。その時私は、ひょっとしたら、モディリアーニは他人の視線が怖くなった時、瞳を描かなかったのではないかと考えた。近年、統合失調症の急性期と覚醒剤服用時において、ともにドーパミン機能亢進状態という、共通の脳内メカニズムが働いていることがわかってきた。モディリアーニに統合失調症があったか全く不確かであるが、南城さんによると、彼にはアルコール依存症があり、色々なドラッグに手を出していた可能性はあるとのことであった。（角田茂）

◆◆◆今回の美術クラブ鑑賞会は今年2月にオープンした大阪中之島美術館。40年前山本發次郎コレクションの寄贈を受け、大阪市制100周年事業として新美術館構想はスタートした。その山發が1938年7,000円で福島繁太郎から購入したモディリアーニの裸婦像。大阪市は1989年折しもバブル経済真っ只中19億3千万で買戻し話題になった。現在モディリアーニの裸婦像の取引価格は200億円前後で、中国人富豪劉益謙が2015年に購入した作品が209億円で最高額であり、大阪市の慧眼には恐れ入る。その裸婦像を目玉に開館記念特別展。ジェラルド・フィリップがモディリアーニを演じた往年の名画『モンパルナスの灯』や近年ではアンディ・ガルシア主演の『モディリアーニ真実の愛』で描かれたこの呪われた画家と妻ジャンヌの不遇の生涯。その物語を投影した抒情のフィルターをかけてモディリアーニ作品を鑑賞してきた。南城先生の名解説でモディリアーニ作品の造形の根源、創意の源泉、時代背景を理解してから3部構成の会場を巡回。彫刻とカリアティードの造形が絵画で実現されていることが作品の独自性と大きな魅力となっていることに納得。でもやっぱり2点の裸婦像の肉感的な伸び伸びとした肢体とじっとこちらを見つめる瞳に魅せられた。瞳描いてるよね。件の裸婦像は撮影可だったのでいっぱい写メして大満足。新美術館も体験できていっつもながら好企画に感謝しています。事務局の皆さん有難うございました。なんとジョニー・デップが、アル・パチーノと共同プロデュースでモディリアーニの伝記映画のメガホンをとる。来年クランクイン、楽しみです。（吉村公彰）

◆◆◆美術館開設準備室設立から苦節30年を経てようやく始動した大阪中之島美術館。エコール・ド・パリを中心に20世紀初めに活躍した画家たちの作品を収蔵する優れたコレクションがいよいよ目の見える。3年ぶりの鑑賞会として向かったのは話題性抜群の開館記念特別展「モディリアーニ」。藝術の理想と過酷な現実に翻弄された夭折の天才、その激烈な歩みが、コロナ禍に苛まれた私たちの胸にストレートに迫ってくる、えも言えぬ感動、そしてそれは甘美ですら…。と、3ヶ月前の記憶をたどっておりますが、正直申し上げて、鑑賞後の懇親会が楽しすぎて、ご参加いただいた会員皆様の愉快的話題の数々が思い出を占領しており、久しく途絶えていた対面での会話がいかに大切なものであったのか

を再認識している次第です。何よりも藝術を愛する多芸多才揃いの奈良日仏協会ですから、来る2024年には美術、音楽、文学、美食等を満喫する創立30周年記念事業案、「パリ藝術探訪」をぜひとも実現したいところ。元気一杯に至福のひとつきを共有できればと夢を抱いております。そのためにも皆さま何卒ご自愛専一にて、よろしくお願いいたします。（南城守）



南城講師による「鑑賞のツボ」に聞き入る参加者

第57回奈良日仏シネクラブ例会（7/31）『落穂拾い』（2000）報告

◆◆2021年2月以来およそ1年半ぶりに、日仏シネクラブ例会を再開することができて、とても嬉しく思います。みんなで集まって映画を見ることの意義をあらためて感じました。今回とりあげたのは、映画作家アニエス・ヴァルダの作品です。作家は自身の興味を追いかけて様々な人との出会いをフィルムに記録しながら、大量消費社会の実態を映し出し、同時に問題の多い現実とどう向き合えばいいのか、問いかけていきます。ドキュメンタリーではありますが、撮る側と撮られる側との関係性をあえて視覚化しようとする彼女の作品では、撮影者の主観が前面に出ることもしばしばです。精力的に活動을続ける中、70代になった自分の老いの徴候（薄くなった生え際や、皺の増えた手）をアップで映し出します。すると、作品が「自画像」的になって一般的なドキュメンタリーにはない味わいがでる一方で、それに違和感を覚える観客もいることでしょう。ヴァルダの作品は、社会のあり方、個人の生き方、芸術創造のあり方を、観る者に考え感じさせてくれます。（浅井直子）



◆◆私は昔、教会学校で子どもたちに、ミレーの絵画『落穂拾い』を掲げて、旧約聖書、レビ記第19章:9-10について話をしたことがある。映画のタイトルを見て、今回初めてシネクラブに参加した。「穀物を収穫するときは、畑の隅まで刈り尽くしてはならない。収穫後の落ち穂を拾い集めてはならない」（新共同訳）。このユダヤ教における寡婦や貧者に対する社会福祉政策の教えは、キリスト教にも受け継がれた。この映画を見て、私は始めて、フランスでこの政策が、刑法として法律化されていることを知って驚いた。この映画の中で精神科医が、精神分析とは、心の落穂拾いだと言っていたのが印象的であった。患者自身が語ることでできなかった、無意識の世界にある悩み事を拾い出すという点では、確かに精神分析は心の落穂拾いである。（角田 茂）

◆◆日本語の表題『落穂拾い』は、この映画の冒頭にあらわれるミレーの名画にちなんだものだろう。ただ原題は、ミレーでは *Les Glaneuses* 「落穂拾いをする女たち」、ヴァルダのほうは *Les Glaneurs et la Glaneuse* 「落穂拾いをする人々と落穂拾いをする女」である。実際ここには様々な落穂拾いする人々が登場する。原義通り麦の落穂を拾う人にはじまり、収穫のあとに残された畑の果物や野菜を拾う人、養殖カキの流れものを拾う人、路傍のゴミ箱をあさる人、パリの路上市場閉店後に捨てられたものを毎日の糧として集める人。そして、かつて私の書棚にも原書と翻訳があった名著『精神分析用語辞典』の共著者であるラプランシュが実はブドウ栽培家でもあったこと、そして彼が暗唱する十六世紀の詩人デュ・ベレーの詩の一節が *Le Glaneur* を歌った有名なものであることなど、新たな発見があった。そして、原題に戻れば、「落穂拾いをする女（単数形）」はまさにヴァルダその人であり、現実のさまざまな場面から落穂のように拾い集められた映像は、声高ではないが思索へと誘うメッセージを伝えてくる。（三野博司）

第58回奈良日仏シネクラブ例会『ラ・ポワント・クールト』（アニエス・ヴァルダ特集②）

✧日時：2022年10月30日（日）14:00～17:00 ✧会場：奈良市西部公民館4階 第1・第2会議室
✧プログラム：『ラ・ポワント・クールト』（La pointe courte, 1955年, 80分）✧監督：アニエス・ヴァルダ
✧参加費：会員200円、一般300円 ✧問合わせ：Nasai206@gmail.com tel. 090-8538-2300（浅井）

✧アニエス・ヴァルダの長編劇映画デビュー作。故郷南仏セート近郊の漁村に久しぶりに戻ってきた夫とパリから彼についてきた妻、彼らは村を散策しながらふたりの関係を回想する。彼らの話と並行して、セートの漁村に生きる人々の暮らしやセートの町の船祭を背景にした土地の人々の大小様々なドラマがくり広げられる。二つの物語が交替しながら進行するドキュメンタリー風フィクション。モノクロの映像が時代の雰囲気醸し出す。セートは、ヴァルダ自身が第二次大戦中にベルギーから疎開して子供時代を過ごした土地で、母の故郷でもある。



2022 年度ガイドクラブ 茶釜工房見学会（9/4）報告

◆◆◆生駒市に 30 年前に住み始めて、生駒市の全国的名物が茶釜ということは何度もニュースなどで見てきましたが、南の方に住んでいることもあって高山地区には行ったことがありませんでした。今回、貴重な機会をいただいて、24 代目左文さんからお話を伺い、実際の職人技を見ることが叶いました。茶の湯とともに発展してきた茶釜の奥深い歴史や、茶釜も流派によって形が異なり 100 種類以上あることなど知りました。1970 年代が、花嫁修業の茶道ブームのピークで、一時は 100 人の職人を抱えていたが、その後、習慣が廃れるとともに、今は海外へ目を向け 10 カ国へ輸出しているというお話。パリとニューヨークでデモンストレーションされて、パリでは伝統を重んじる姿勢が感じられたが、ニューヨークではビジネスの印象が強かったとのこと。茶碗に取っ手をつけてみたり色々チャレンジされているのに好感を持ちました。海外向きにと発案されたマドラー式茶釜をお土産に買いましたので、これで美味しい抹茶（カクテル？）を飲もうと考えているところです。（杉谷健治）

◆◆◆茶道というと、花嫁修業の一環として小習いぐらいの知識しかなかったが、一つ一つの茶釜が手作りで作られている工程を初めて見学させていただくことができ、非常に貴重な体験だった。堂主から離れたところに座ってしまったせいで、見事な技をよく見られなかったのは少し残念だった。機会があれば、茶釜の里に再び訪れて、もっと間近でその作業を見てみたいものだ。現在、フランスは日本ブームで、フランス人の中でも茶道に興味を持っている人も少なからずいるのではないと思う。コロナのせいでフランスからの観光客もばったり途絶えているが、もし今後、茶道の心得があるフランス人が私のところに来たら、是非この茶釜の里に案内したい。そのためにも、当日いただいた日仏二か国語の資料をよく読み、保管しておきたい。今までは茶釜を持っていたが、しまったままになっていたが、お点前はできなくとも、今日目にした茶釜を作っている工程を思い出しながら、気軽にお茶を立ててみようかと思う。（小寺順子）



◆◆◆学研北生駒駅に集合し、バスで高山地区へ移動。地図で見ると大阪府と京都府に挟まれた富雄川沿いのなだらかな丘陵が続く地域が高山地区で、想像していた通りの景色の中をバスは進み、目的地のバス停で下車。田んぼの中を目的地の竹茗堂さんへ。高台の見晴らしの良い場所にお住まいがあり、早速、茶釜についていろいろとお話を伺いました。何より高山地区では室町時代から茶釜製作が続いていることに驚きました。それとヨーロッパなどからもお客さんがみえるとのこと。茶道が少しでも世界平和に役立っているのであれば嬉しいことと思います。平和な田舎の景色を見ながらそう思いました。数年後には万博会場から乗り換えなしで世界中のお客様をお迎えすることになるのでしょうか。お話をお聞きしながら抹茶と羊羹を頂きましたが、その羊羹の美味しかったこと。ちょうど前日、鳥羽市が主催する海女についてのイベントが関西日仏学館であり、海女を深く知ることができましたが、二日続けて、今までほとんど知らなかった日本の文化について理解を深めることができました。今回も奈良日仏協会が主催するガイドクラブに参加することができ、感謝しております。茶釜のように少しでも社会をかき混ぜることができればと思い帰路につきました。（三重日仏協会会員・田中豊士）



◆◆◆日本庭園に囲まれた縁側のあるお座敷でゆったりしながら、第 24 代久保左文さんのお話を伺うことができました。「わび茶」の創始者とされる村田珠光が奈良の人で、応仁の乱の時代に奈良に帰還した時、田地で庵を営んで茶を立てていたそうです。奈良がわび茶発祥の地だったとは！ひとくちに茶釜といっても実に様々な形のものがあることに驚かされました。1 本の細い竹をまず 4 分割し、さらに分割を繰り返して 160 本の穂先を作り、それらを削ったり丸く反らせたりして全体の形を整えていきます。とても繊細で根気のいる作業です。今まで気づけなかった日本文化の奥深さに触れることができ、お抹茶がいつそう好きになりました。（浅井直子）

「モリエールの喜劇」(12)『気で病む男』(Le Malade imaginaire, 1673)

山本 邦彦 (やまもと くにひこ)

モリエールの最後の作品となった3幕散文の喜劇です。モリエールはこれまで『いやいやながら医者になれ』など数々の作品に医者やニセ医者を登場させ、その形式主義・権威主義の医術を痛烈に批判してきましたが、最後になってはじめて患者のほうを主人公に据えました。

裕福な町人アルガンは身体に異常はないのに、自分を重病人だと思い込み怯えています。それに付け込んで、医者や薬剤師が毎日彼を治療漬け、薬漬けにしています。当時の三大治療法は刺絡（しらく、血を抜く療法）、下剤、浣腸でしたが、アルガンは月に下剤12回、浣腸20回、刺絡の数はわかりませんがおそらく10数回受けています。

アルガンは自分の病気のことしか考えないエゴイストです。そのうえ結構ケチです。そこで医療費節約のため娘アンジェリックを新米の医師トマ・ディアフォワリュスと結婚させようとしします。そのお見合いの場面（第2幕第5-6場）が秀逸です。黒い医者衣装に身を包んだディアフォワリュス父子が登場。トマは愚鈍丸出しのお坊ちゃんです。ベリーヌ（アルガンの後妻）を見合い相手と取り違えたあと、アンジェリックには暗記してきた美文調の挨拶を棒読みし、さらには死体解剖の現場に招待したいと申し出る始末です。そして口説きの文句にも学者ぶってラテン語を交え、彼女をうんざりさせてしまいます。

もうひとつの魅力的な場面はアルガンが幼い娘ルイゾンに折檻して姉アンジェリックの秘密を聞き出そうとする場面（第2幕第8場）です。ルイゾンは拒みきれなくなって、死んだふりをして倒れます。そのときのアルガンのあわてようのおかしさ。その後ルイゾンの白状へと至りますが、ここはゲーテが作劇上のうまさを絶賛したところでした。モリエールの作品に子どもが登場するのもこの一カ所だけです。アルガンは病気に怯える気の病、今で言うノイローゼ（この語も多少古びてはいますが）でした。結核を患っていたモリエールは4回目の上演直後、血を吐いて亡くなりました。気で病むどころか、命をかけての舞台だったのです。

* * * * *

今回の連載で、モリエールの作品33作中、ほぼ三分の一に当たる12作を紹介しました。いずれも、今なお世界中で上演され続けている名作です。しかしモリエールは劇作だけに専念した座付き作家ではありませんでした。彼は自作のほぼすべてで主演を張った人気俳優でもありました。さらに、今日いうところの演出家でもありました。そして何よりも彼は劇団を率いる座長として管理運営に、とりわけルイ14世との折衝に、奔走しました。彼はトータルな意味での芝居の人（homme de théâtre）でした。

しかしこの不世出の芝居の人は生来の天才というよりは、むしろ努力の人でした。13年に亘るドサ周りの苦しい体験からはもとより、古今の喜劇や笑話から、あるいはコメディ・デラルテや同時代の俳優たちとの付き合いから、様々な材料を仕入れて自分のものにしました。これに加えて私は、16世紀の2人の思想家からの影響をとくに強調しておきたいと思います。その1人ラブレールから受け継いだのは自由思想と風刺の精神、またもう1人のモンテーニュからは中庸と寛容の精神および人間本性への信頼です。

ドサ周りからパリに戻って、モリエールの才能は一気に開花しました。彼は時代の風俗に照準を合わせました。嫌みな気取り、にせ信心、吝嗇、追従、銜学趣味、えせ医術。至る所に漂うこうした弊風を俎上に載せることにしました。ある情念に取りつかれた意固地な人物たちが周りに迷惑をかけている姿を笑いの対象にすることで、「性格喜劇」と呼ばれるスタイルを完成させました。典型的人物を描くというこの技法は、のちに小説家バルザックやスタンダールに大きな影響を与えました。

ところで、モリエールの死後、劇団はどうなったかといいますと、翌年ライバル劇団マレー座と合併し、さらに1680年もう一つのライバル劇団オテル・ド・ブルゴーニュ座と合併してコメディ・フランセーズとなりました。今日まで続く世界最古の劇団です。今年は奇しくもモリエール生誕400年に当たりますので、コメディ・フランセーズでは彼の重要作品8本を上演プログラムに掲げて盛大に祝いました。



コメディ・フランセーズ：
右から ルイ・セニエ（アルガン）、ジョルジュ・シャマラ、ジャン・ポール・ルシヨン（ディアフォワリュス父子）



モリエールの椅子:モリエールがアルガン役で使った舞台道具(コメディ・フランセーズ所蔵)

ホームズ物語とフランス (8) 長谷川 明子 (はせがわ あきこ)

私立探偵としてデビューしたばかりのホームズであるにも関わらず、すでにフランスでは、彼を師と仰ぐヴィアールという探偵が登場し、今でいう鑑識にあたる「煙草の煙の分析」と「足跡の石膏保存」に関するホームズの論文を仏語訳しているというエピソードが記されている《四つの署名》(1890)。また、フランス共和国のために助力したおかげで、引退後の生活が保障され、好きな化学実験にも没頭できるほど莫大な報奨金をもらっているというホームズ自身の言葉もある《最後の事件》(1893)。物語の中で詳細に語られてはいないが、ホームズとフランスとの関りが大きいものであったことは、強い状況証拠として示されている。《最後の事件》でホームズが南フランスを中心に長期滞在して捜査していた事件は、「モナ・リザ」を含む有名絵画がルーヴル美術館から盗まれた事件で、グラナダテレビのホームズ・シリーズでは、モリアーティー教授が仕組んだことになっていた。またフランス大統領暗殺者の逮捕劇もあり、これは《金縁の鼻眼鏡》(1904)に記されている。

Mon Nara に「ホームズ物語とフランス」というテーマで連載記事を書かせていただき今回で最終回を迎える。英文学の評論でもなく、ヴィクトリア朝時代の英国を論ずる社会学や歴史研究でもないシャーロキアン文章であるため、無理なこじつけや、ひいきの引き倒しがあったかと思う。実際、シャーロキアンと自称するのも気が引けるほど、過去、現在にわたって世界中に多くのシャーロキアンがいて、例えば、日本では、ヴィクトリア女王時代のロンドンに外交官として滞在した有名な政治家牧野伸顕(1861~1949)とその娘婿、宰相吉田茂(1878~1967)、その息子英文学者の吉田健一(1912~1977)などはもっとも有名であろう。アメリカのシャーロキアン団体の集会に、牧野は孫の健一とともに出席したとの話も伝わっている。

作家、森茉莉(1903~1987)は随筆の中で「私は、多くのホームズファンの中で、私が一番のファンだと思っている。それが嘘か本当かは、ホームズ自身に聞いてみればわかることだ。」(『幸福はただ私の部屋の中だけに』ちくま文庫、2017年、p. 234)と、熱く語っている。

シャーロキアンの中には、ホームズをヴィクトリア時代のロンドン、ベーカー街に住んでいた実在の人物のように語る人たちもいれば、原作者であるはずの Conan Doyle を「出版代理人」と呼ぶ人たちもいる。確かに、物語の中では、ホームズの事件簿を整理し世間に発表したのはワトソン博士になっているが、これには、後年、心霊主義に走った作家 Doyle に対する読者の失望と批判が込められているからだと言われている。しかし、Conan Doyle をあえて「出版代理人」と呼ばなくてはならないものだろうか、と私自身はこのことに、少し抵抗感を持っていた。

そんな中、本誌編集者の浅井直子さんから、21世紀フランスを代表する作家の一人と言われるミシェル・ウェルベックが、小説『セロトニン』(*Sérotonine*, 関口涼子訳, 河出書房新社, 2019年)のしめくり部分の近くで、Doyle に言及していることを教えて頂いた。「……彼は生涯ずっと他の誰よりも『読み始めたら止まらない』本を書き続け、おそらく世界文学史上でも最高クラスではないかと思うのだが、それは彼自身が重きを置いていたところではない…… Conan Doyle の真実は、各ページに、高貴な魂、忠実で良き心の誓いが感じられることなのである。最も感動的なのは、彼自身の死に対する態度だろう。……一生を通じ、繰り返し起こる近親の残酷な死に直面し、その中にはイギリスの戦争の計略の犠牲になった自分の息子たちも含まれていたのだが、最後の救いとして心霊術に走るしかなかった、それが最後の希望であり、身内の死を受け入れることもキリスト教に皈依することもできなかったあらゆる者がたどり着く最後の慰めなのだ。」(前掲書、p. 279)。

「ホームズ物語とフランス」の連載を締め括るにあたって、英国ヴィクトリア時代にあって、フランス愛を作品の中に反映させていた Conan Doyle の作品が、新しい時代の読者に読み継がれていくことを願ってやまない。連載を終わった今、ホームズの家系について触れた第5回(2021年10月号)に登場した南フランスの町々を訪れてみたいものと私は夢みている。



19世紀末、ロンドンの月刊雑誌「ストランド・マガジン」に連載された、挿絵画家シドニー・パジェットによるシャーロック・ホームズの肖像画。



1900年、ブルームフォンティーンの野営地で書き物をする Conan Doyle。第二次ボーア戦争では、同地の野戦病院の軍医として従軍。『シャーロック・ホームズ完全ナビ』(国書刊行会、2016年)より。

私の好きなワイン（6）「シャンパーニュ」 小寺 順子（こてら じゅんこ）

皆さんはシャンパーニュとスパークリングワインの違いがわかるだろうか。恥ずかしいことだが、もし単体で出されてどちらですかと聞かれたら、私はわからないことが多いと思う。しかしこの二つを並べて飲み比べてみると違いは歴然とする。普通シャンパーニュは泡が非常に細かくて味がきりっと引き締まっている。シャンパーニュは、シャンパーニュ方式という瓶内二次発酵製法で作られる。熟成期間は15か月以上。使用ブドウ品種はシャルドネ、ピノ・グリ、ピノ・ムニエと決められている（最近6種類のブドウを使用したムターールというシャンパーニュが作られたらしいが）。そしてフランスのシャンパーニュ地方で作られたものだけがシャンパーニュと名乗れる。シャンパーニュ方式で作られてもシャンパーニュ地方以外で作られたものはシャンパーニュとは名乗れない。



Salon のシャンパーニュ

フランスではクレマン、イタリアではフランチャコルタ、スペインではカヴァなどがシャンパーニュ方式で作られたスパークリングワインである。私はドゥラモットというシャンパーニュが好きだ。これはかの有名な超高級シャンパーニュであるサロン（Salon）の姉妹であるが、以前サンヴァンサン（当協会法人会員）のワイン会で、3種のドゥラモットの飲み比べがあった。1) 普通のドゥラモット NV（ノンヴィンテージ）、2) ドゥラモットのブランド・ブランの NV（シャルドネだけで作られたシャンパーニュをブランド・ブランという）、3) ドゥラモットのブランド・ブラン 2008（シャンパーニュの当たり年）である。普通のドゥラモットよりもブランド・ブランの方が美味しいと思ったが、NV と 2008 の違いはわからなかった。

つくづくワインは複雑だと思う。ワインの違いが分かるような舌を持つにはどうすればいいのだろうか。

ブルースト雑感（3）「シナノキの花」と「水中花」 浅井直子（あさいなおこ）

『失われた時を求めて』のマドレーヌの挿話で主人公の男性が口にする紅茶は、正確には「シナノキのハーブティー」で、フランスでは神経を落ち着かせて安眠をもたらす効能のあるお茶として、今でも中高年の女性によく飲まれています。「シナノキ tilleul」は「菩提樹」とも訳されていますが、ヨーロッパでは街路樹や公園に植えられていて、成長すると高さ数メートルにもなり、6月初めの花の頃に、この木の下に立つととてもいい匂いがします。

2019 年春、コロナ禍になる前年フランスを旅した時、パリではじめて花の咲いたシナノキを見ることができました。びっしり生い茂った緑の若葉の下に垂れている無数の花が風にゆれ、あたりには甘味を含んだような香りがただよっていました。小さな蕾はクリーム色ですが、淡いオレンジ色の花びらが房をなして下方に広がると、あでやかな黄金色と形容したくなるような色合いです。わたしはしばらく立ち止まって見とれていました。別の時期に同じ木の下を通りがかっても、それがシナノキだと気づかなかったことを不思議に思いながら。



小説では、中年にさしかかった主人公がシナノキの花の風味のお茶に浸したマドレーヌを味わうと、少年時代に休暇を過ごしたコンブレの古い家、広場、通り、小道の記憶が次々に浮かんできます。その文の後に「水中花」の比喩を含む以下の文章が続いて、『スワン家のほうへ』第一章の第一部が締めくくられます。

そして日本人の遊びで、それまで何なのか判然としなかった紙片が、陶器の鉢に充たした水に浸したとたん、伸び広がり、輪郭がはっきりし、色づき、ほかと区別され、確かにまぎれもない花や、家や、人物になると同じで、いまや私たちの庭やスワン氏の庭園のありとあらゆる花が、ヴィヴオンヌ川に浮かぶ睡蓮が、村の善良な人たちとそのささやかな住まいが、教会が、コンブレ全体とその近郊が、すべて堅固な形をそなえ、町も、庭も、私のティーカップからあらわれ出たのである。（『スワン家のほう』岩波文庫第1巻、116-117頁）

文中の「日本人の遊び」が「水中花」のことです。忘れていた記憶が蘇る現象が、小さな紙片が水中で花へと広がっていく様子に喩えられています。ブルーストはパリでジャポニズムが流行していた1904年春に、友人から本物の水中花をプレゼントされ、それが実際にどんなものか知っていました。水の中で花だけでなく人々やその住まい、教会やコンブレの町全体まで広がるというのは、作家のイメージネーションによる創作です。見事な比喩によって、小説世界を豊かに広げるブルースト。まもなく没後百年の命日（11月18日）を迎えますが、日本人のように水中で花が開くのをじっと見つめて楽しむ作家の姿を想像しながら、今日世界中で多くの人に読まれている小説のハイライト場面に、失われつつある日本人の生活文化を書き記してくれたことに、感謝を捧げたいと思います。

ジャン＝リュック・ゴダール Jean-Luc Godard (1930-2022)

ピエール・シルヴェストリ

Mardi 13 septembre 2022. J'aide mon père à emballer son vélo d'appartement. Au même moment, JLG décède. Je l'ignore encore. Ce n'est qu'en fin d'après-midi que ma mère m'annonce la terrible nouvelle tant redoutée...

Le Monde se dérobe sous mes pas. J'ai le sentiment de perdre un proche. J'ai toujours cru qu'il ne pouvait pas mourir, qu'il était immortel. Son cinéma m'a aidé à vivre et à penser par moi-même. Seul le philosophe allemand du XIXe siècle, Nietzsche, m'a autant apporté en termes de poésie et de réflexion.

Ma rencontre avec son œuvre a commencé avec l'un de ses films les plus célèbres que j'ai vu à la télévision dans mon enfance. Il s'agissait du *Mépris* (1963). Faute de maturité, je ne comprenais pas pourquoi le personnage joué par Brigitte Bardot en venait à mépriser son mari incarné par Michel Piccoli, mais je me souviens avoir été totalement attiré par la lumière et les couleurs ainsi que par la scène d'ouverture, où le couple étendu sur son lit baigne dans des couleurs irréelles et vit ses derniers instants de bonheur.

Grâce à *Pierrot le fou* (1965), véritable déluge audio et visuel dont l'intrigue policière décousue progresse par collages d'images et de sons que j'ai découvert sur le petit écran pendant mon adolescence, Godard m'a donné envie de suivre son art toute ma vie et ce long métrage m'a rendu amoureux de l'actrice Anna Karina, alors épouse du cinéaste.

Avec plus de cent films à son actif, il a connu plusieurs grandes périodes comme Picasso en peinture : les années Karina (1959-1967), les années Mao (1967-1973), les années vidéo (1973-1979), les années de retour au cinéma commercial (1980-1988), les années des essais cinématographiques (1988-2018) dont *Les Histoire(s) du cinéma* (1988-2000).

Si je devais mettre en avant un opus godardien, ce serait *Nouvelle vague* (1990). La rencontre entre Alain Delon et Jean-Luc Godard, donc entre l'acteur français le plus important et le metteur en scène le plus iconique du septième art en France depuis 1960 environ, constitue un pur miracle qui crée des plans émouvants d'une vraie beauté inoubliable. Godard sera toujours là car comme l'écrivait le grand auteur américain William Faulkner : « Le passé n'est jamais mort, il n'est même pas passé ». (Pierre Silvestri)

2022年9月13日火曜日。エアロバイクを梱包する父を手伝っていた時刻にゴダールが亡くなった。母がこの怖れていた辛い知らせを教えてくれたのは、ようやく午後遅い時間になってからだった。足元で世界が崩れ、近親者を亡くしたような気持ちになった。ゴダールは不死身だとずっと思っていた。彼の映画は自分自身で考えて生きる助けになった。19世紀のドイツの哲学者ニーチェだけが詩と省察の形で同じような影響をもたらしてくれた。

ゴダール作品との出会いは、子供の時にテレビで見た『軽蔑』(1963)。まだ成熟していなかった私は、ブリジット・バルドー演じる人物がなぜ、ミッシェル・ピコリ演じる彼女の夫を軽蔑するようになるのか、わからなかった。それでも光と色彩、ベッドに寝ころぶカップルが非現実的な色彩に染まってふたりの最後の幸福な時間を過ごすオープニング・シーンにすっかり魅せられた。青年時代、小さな画面の中に、支離滅裂な探偵物のストーリーが映像と音声のコラージュによって展開するのを発見した作品『気狂いピエロ』(1965)は、私を生涯ゴダールの芸術についていきたい気持ちにさせ、当時ゴダールの妻だった女優アンナ・カリーナの虜となった。

100本以上の映画の功績をもつ彼は、ピカソの肖像画のようにいくつかの重要な時期を経験している。カリーナ時代(1959-1967)、毛沢東時代(1967-1973)、ビデオ時代(1973-1979)、商業映画復帰時代(1980-1988)、「映画史」の時代(1988-2000)を含む映画エッセイの時代(1988-2018)。

彼の作品を一本挙げるなら、『ヌーヴェル・ヴァーグ』(1990)になるだろう。アラン・ドロンのゴダール、すなわち最も重要なフランス人俳優と1960年頃以来のフランスにおける第七芸術のもっとも象徴的な監督との出会いは、忘れがたい真の美しさをそなえた感動的なショットを産みだす純粋な奇跡を作りあげている。ゴダールはいつまでもそこにいるだろう。なぜなら、アメリカの偉大な作家ウィリアム・フォークナーが書いているように、「過去は死なない、過ぎ去りさえしない」から。



随想「実験医学の父、クロード・ベルナール」 角田 茂（つのだ しげる）

La vie, c'est la création. 生命、それは創造である。

クロード・ベルナール Claude Bernard (1813-1878) 著『実験医学序説』より

19 世紀前半のフランスでは、生理学という言葉が流行した。ブリア＝サヴァランの『味覚の生理学 (Physiologie du Goût, 1825)』やバルザックの『結婚の生理学 (Physiologie du Mariage, 1829)』がその代表である。医師であるクロード・ベルナールは動物実験によって確認をしていない事柄に対して、生理学という言葉の使用を好まず、生理学の代わりに実験医学という言葉を使った。彼は現代風の言い方をすれば、近代生理学の父である。

ベルナールは 1813 年、ブルゴーニュ地方ボジョレー地区、サン・ジュリアン村のブドウ栽培ワイン醸造農家に生まれた。パリ大学医学部卒業後、フランソワ・マジャンディエ (François Magendie, 1783-1855) の助手となり生理学的な実験を行い、1854 年に新設されたソルボンヌ大学理学部生理学教室の教授となった。さらに 1855 年、マジャンディエの死後、彼の後を継いでコレージュ・ド・フランス (Collège de France) の教授に就任した。この時、彼は講座名を実験生理学から実験医学に変更している。コレージュ・ド・フランスは、フランソワ 1 世によって 1530 年に創設されたコレージュ・ロワイヤル (Collège Royal) を母体とする、フランスで最も権威のある市民大学的高等教育機関である。日本人としては私の尊敬する加藤周一がここで講義をしている。ちなみに、私は学生に「デートで食事をする時、ボジョレーを注文してクロード・ベルナールの話をしなさい」と言って来た。



クロード・ベルナール

代表的な業績を紹介すると、グリコーゲン (仏: glycogène, 英: glycogen) の命名者としての実験である。肉のみで飼育した犬の門脈血と肝静脈血のブドウ糖値を測定すると、後者のみにブドウ糖が認められ、さらに肝臓にグリコーゲンの存在を確認した。これにより体内に摂取されたブドウ糖は肝臓にグリコーゲンとして蓄えられ、血中ブドウ糖値が低下すると肝臓内のグリコーゲンがブドウ糖に分解され、肝静脈中に放出されることを解明した。この内部環境の恒常性 (la constance du milieu intérieur) の発見は 20 世紀になって、米国の生理学者ウォルター・キャノンのホメオスタシス (homeostasis) として、さらに展開していく。

もうひとつの大きな業績は、南米の先住民が使っていた矢毒クラレーの研究である。クラレーを投与したカエルは、動けなくなって呼吸は止まるが、心臓が動いていることを発見した。この時、麻痺した四肢の筋肉を電気刺激すると、筋肉は正常通り収縮することも発見し、クラレーの薬理学的作用は神経筋接合部 (仏: jonction neuromusculaire, 英: neuromuscular junction) におけるシグナル伝達の遮断によることを解明した。この発見は、全身麻酔において必須の筋弛緩剤の開発へとつながっている。

1865 年に出版された名著『実験医学序説 (Introduction à l'étude de la médecine expérimentale)』では、医学の研究は観察にとどまるべきではなく、動物実験によって確認する必要性があり、観察医学から実験医学へのパラダイムシフトの必要性について述べている。思想的には、生命現象の研究において物理化学的決定論は通用しないという生氣論を打破し、科学的な証拠に基づく医学を目指すものであった。ベルナールは亡くなる直前、『生命の現象 (Les phénomènes de la vie, 1878)』というタイトルの論文を書いている。彼はその中で、「変化」というギリシア語 *metabolē* から造られた代謝 (仏: métabolisme, 英: metabolism) という医学概念を提唱した。ヒトは秒単位で物質科学的に変化している。10 年すれば、ほとんど別の物質によって構成される別人になると言われている現象である。ドイツの化学者リービッヒ (Justus von Liebig, 1803-1873) は、『化学の農業および生理学への応用』第 7 版 (1962) の中で、「できるだけ多くの収穫を短期間に得ようとすると、土壌の養分が奪いさらられ、人間と自然との物質代謝 (Stoffwechsel) に亀裂を生み出す」ということを述べている。リービッヒはフランスのゲー＝リュサック (Joseph Louis Gay-Lussac, 1778-1850) の研究室に留学しており、ベルナールとの交友関係もあった。従ってベルナールは、この物質代謝からヒントを受け、医学的概念としての代謝を考えたのかもしれない。

1878 年、彼が亡くなると、ドラクロアの壁画で有名なサン・スルピス教会で国葬がなされ、ペール・ラシェーズ墓地 20 区画に埋葬された。そのすぐ南側に位置する 11 区画にはショパンが眠っている。

With コロナのフランス体験記（2022 年 6 月） 林 薫子（はやし かおるこ）

2022 年 6 月に約 4 年ぶりにフランス、パリに出張しました。パリでの展示会見学が目的でしたが、正直出発前はコロナ禍やウクライナ戦争の影響でフランスが荒んでいたらイヤだなと心配しておりましたが、フランスに到着するやいなや、そこは No マスク（Sans Masques）の世界、満面の笑顔と初夏の太陽に輝き、「フランス人感じがいい」と思いました。「フランス人感じがいい」というとまるでコロナ前はフランス人の感じが悪かったみたいですが、確かにフランス人は英語で話しかけたら無視するとか、カフェで注文してもなかなか応じてくれないとかそんな印象も少なからずありましたよね。しかし、今回 With コロナのフランスではカフェの店員さんや街を歩くフランス人も本当に感



マレ地区ヴォージュ広場の昼休み。月曜日でもピクニック気分。

じがよかった。旅行者や外国人をととてもウェルカムな気分で明るく優しく迎え入れてくれました。やはりフランスはコロナ初動で完全にロックダウンをしたので、日常生活や観光客が戻ってきた喜びや、カフェなどで接客できる働く喜びがあるのかなと思いました。またフランス人はもともとマスクが大嫌いなので、マスクをしなくてもいいというだけで、みんなニコニコしているのかも、という意見もありました。

印象としては 98% の人はマスクをしていないと感じました。すでにスーパーやレストラン、カフェや公共交通機関でのマスク着用義務がありません。私が滞仏していた 6 月中旬はコロナ第 7 波が近づいている時期で、保健大臣がメトロやバスではマスクをするようにと呼びかけておりましたがマスクをしている人はほとんどみかけませんでした。私が訪問した展示会でもマスクをしている人は日本ブースの日本人だけで、会場で大声で話したり、コーヒータイムや昼食もおしゃべりしながら楽しんだりして、いつも通りの展示会風景でした。



バスの中のコロナ対策ポスター。一応マスク着用をよびかけています。

ではフランスでマスクをしているのは誰なのか？もちろん徹底的にコロナ感染予防をされている方もいると思いますが、その多くはコロナに罹患されている方では？と私は思います。というのも私は日本入国に必要な帰国前 PCR 検査を受けた際、無症状ながら陽性となっていました。陽性が判明するとフランス保健省の指示通り、私はホテルを延泊し「自主隔離」しましたが、必要に応じて、密をさけながら、自分でマスクをしてファーマシーやスーパーで日用品を購入しました。そのときはじめてフランスでマスクをしている人は「罹患者」だと実感しました。だからこそ店員さんはマスクをしている私と距離をとり、パン屋で私の後ろに並んでいる人も適度な距離をとってくれました。本来の意味でマスクが活用されているのです。ちょっと体調が悪いから出勤せずに仕事をテレワークに変更したり、身近な人が陽性となれば自主的にファーマシーで無料の抗原検査を受けたりと、With コロナのフランスは自主性をもって恐れずにコロナと共生していることを実感しました。

フランスとSDGs

駒田 奈美 (こまだ なみ)

2015年9月に国連総会でSDGs(持続可能な開発目標)が採択されて以降、各国では、様々な取り組みが展開されています。フランスは、SDGsへのアクションが進んでいる国の1つであり、若者たちも大きな関心を寄せています。今回はSDGsと関連するフランスのアプリの紹介をいたします。

「Phenix, anti-waste & good deal」SDGsの目標2「飢餓をゼロに」に貢献している取り組みです。世界中では、約3分の1の食料が廃棄されています。食品ロスを減らすために、フランスのスタートアップ企業がアプリで以下の取り組みを行っています。

① お店で売れ残った食材の販売: 家から近いお店で売れ残りの食材のあるお店がアプリで表示され、5ユーロで詰め合わせを購入することができます。購入者は中身を選べないため、「Panier Surprise」と呼ばれ、何が入っているかわからないため、ドキドキ感がありつつも商品をお得に購入できます。

② 協会への寄付: 売れ残りの食品がさらに売れ残った場合は協会に寄付し、SDFや貧しい人に、提供されます。余った食材を協会に寄付することによって、通常支払う食べ物の処分費用(1000キロにつき150ユーロ)の支払いをせずに済みます。

「Swapbook」SDGsの目標4「質の高い教育をみんなに」に該当する取り組みです。Swapbookは、学生向けの古本を売買できるアプリです。フランスの義務教育は3歳から16歳であり、公立学校の学費は無償ですが、学校で使用する教科書は各自で支払わなければいけません。アプリをダウンロードし、自分のプロフィールをアップロードすることで、本を出品できるようになります。出品する際は、本についているバーコードを写真に撮るだけで自動的に本の情報すべてがアップロードされる仕組みになっています。手ごろな価格で必要な本を手に入れることができます。

フランスでは、様々な角度からSDGsへの取り組みが行われています。環境においては、2021年の1月から一部の使い捨てのプラスチック製品(コップ、カトラリー、お皿、ストロー)が販売禁止となりました。2030年のSDGsの目標達成に向けて行われているフランスの取り組みに、今後も注目していきたいと考えています。



文化は国際交流の必須アイテム

西崎 美也子 (にしぎ みやこ)

はじめまして。この度、満を持して(?)入会させていただきました。私は定年まで奈良市職員として、文化・観光・国際交流の分野の仕事に約20年携わっておりまして。そのご縁で奈良市美術家協会会員である南城守さんと長年懇意にさせていただいておりましたので、美術クラブのイベントには何年か前から参加させていただいておりました。そして遂に、大阪中之島美術館でのモディリアーニ展の後、皆さんとビールを飲みながら入会を決意いたしました(ちょっと大袈裟ですが)。

退職後も何かしていないと罪悪感を感じてしまう悲しい性分で、何かと忙しくしております。中心に据えているのは書道で、作品制作に取り組んだり、生活の書をコンセプトに、実用書の講座を主催したりしています。また、ここ数年着物の着付けを学んでおり、なるべく着物で出かけるようにしているので、今後も協会のイベントには着物で現れると思います。仕事を通じ、自国の文化を語れることが、多様性を尊重しあう国際交流には必要なことだと痛感したので、これらをこれからの活動にも活かせたらと思っています。他に健康維持のためヨガとウォーキング、そして花が好きなので、庭の花と会話することを日課にしています。

奈良市はベルサイユ市と姉妹都市提携を結んでおり、私はその交流事業を担当したことから、現地で活動されていた日本人画家大石良太さん(今はポントルソンに住み、モンサンミッシェルを描く毎日を過ごしておられます)と知り合い、今も交流を続けています。

三年前の夏、私は友達と三人でフランスを旅行して、大石さんの家に泊めていただき、モンサンミッシェルを満喫しました。その夏はフランスが猛暑に襲われた年で、モンサンミッシェルは39℃、その後パリに移動したのですが、全く日陰のない42℃のコンコルド広場をふらふらになりながら歩いたのは貴重な思い出となりました。

コロナ禍の下、海外に行くことはままならない状況ではありますが、近い将来三野会長を団長にフランス訪問が実現することを願っています。私はフランス語も話せませんし、特にフランスに詳しい訳でもございませんが、皆さんと楽しいひと時を過ごせたらと思っています。どうぞよろしくお願い申し上げます。



ポントルソンの大石さんの家の前にて
右から2番目が大石氏、3番目が私
掲げられているのはノルマンディーの旗

第 151 回 フランス・アラカルト「ラ・ロシュェルの魅力を語る」のご案内

- ❖ 日時：2022 年 11 月 27 日（日）15:00～17:00 ❖ 会場：生駒市コミュニティセンター 2F 201・202 号室
 - ❖ 参加費：会員 200 円、一般 700 円 ❖ 申込先：sugitani@kcn.jp TEL: 090-6322-0672
 - ❖ ゲスト：ロード・ギエム（LAUDE Guilhem）さん ※当日はフランス語と日本語でお話をさせていただきます。
- 15 歳から日本語の勉強を始め 17 歳で広島に短期留学。2014 年に INALCO に入学。日本宗教史を専攻し、2020 年に修士課程を卒業。その後、2021 年より奈良県国際交流課に国際交流員として勤務。趣味は旅行、歴史、ハイキング。
- ❖ ロード・ギエムさんからのメッセージ：皆さんこんにちは。フランス・アラカルトの席で私の故郷の話ができるのをとても喜んでいきます。ラ・ロシュェルはフランス南西部のシャラント＝マリティーム県にある大西洋に面した小さな港町です。港の入口にある中世からある二つの塔が有名ですが、ほかにも水族館や数多くのお祭で知られています。ラ・ロシュェル近郊についてもご紹介します。シャラント海岸の自然の美しさ、レ島、エクス島、オレロン島、それにボワヤール要塞を忘れてはいけません。牡蠣の養殖でも有名で、日本の牡蠣養殖者との交流は、東日本大震災の時に話題となりました。毎年日本映画祭が行われ、日本人のコミュニティもあるなど、日本との交流も活発です。



（港にある二つの塔）

第 58 回 奈良日仏シネクラブ例会案内（詳細は本誌 3 頁をご覧ください）

- ❖ 日時：2022 年 10 月 30 日（日）14:00～17:00 ❖ 会場：奈良市西部公民館 4 階 第 1・第 2 会議室
- ❖ プログラム：『ラ・ポワント・クールト』（La pointe courte, 1955 年, 80 分）❖ 監督：アニエス・ヴァルダ

《2022 年度第 4 回理事会報告》……事務局 日時：2022 年 9 月 15 日（木）15:00～16:10。場所：野菜ダイニング「菜宴」。出席者：三野、浅井、高松、菌田、藤村、杉谷。議題 1. 会員数の確認。議題 2. 7/21 理事会後の活動：(7/22) ガイドクラブ「茶話会」、(7/31) 第 57 回シネクラブ例会『落穂拾い』、(9/4) ガイドクラブ「茶室工房見学会」。議題 3. 今後の行事：(10/9) 秋の教養講座「フランス語とともに歩んだ道」講演大西弘・懇親会、(10/30) 第 58 回シネクラブ例会『ラ・ポワント・クールト』、(11/27) 第 151 回フランス・アラカルト「ラ・ロシュェルの魅力を語る」講師ロード・ギエム、(2/11) 来年度総会、その他今後の行事案。議題 4. MonNara 通信 No.13 8/8 発送、No.14 12/12 発送予定、Mon Nara No.300 10/18 発送予定。議題 5. その他：ホームページ講習会 (8/4)。次回理事会 11 月 17 日（木）15:00～16:30「菜宴」にて。



編集後記 ☆ 黄金色のこうべを垂れる「稲穂」（épi de riz）が田圃一面に広がっているのを車窓から目にする、自然の恵みと育てる人間のハーモニーが聞こえてくるような気がします。田植時から日照りや台風の雨風など予測のつかない天候に左右されながら稲刈りを終えるまでに、どれほどの手間がかけられていることでしょうか。実りの秋は一年を無事に過ごせたありがたさを目に見えるように感じさせてくれます。☆ Mon Nara は今号で第 300 号を発行することができました。1993 年の「奈良日仏協会発足準備会」のための機関誌「Pot-pourri」が前身です。「百花香」を意味する「ポプリ」編集者の川下裕史さんは、その後 Mon Nara の編集も担当され、現在も会員を続けておられます。私が 96 年に入会した当時からお米や野菜作りをされていて、当時、読書会のメンバーでバーベキューをしたり、新米を賞味させていただく機会もありました。☆ 初代の川下さんはじめ、これまで本当にたくさんの会員の方が編集・印刷・発送作業に携わってきてくださいました。それも奈良日仏協会会員の読者の皆さまの善意と熱意の支えあつてのこと。今後も日仏文化交流活動の継承に努めたいと思います。（N. Asai）

- ◆ 当協会では**会員を募集**しております。お申込み、お問合せは下記事務局まで。
- ◆ 本誌への投稿、特に新鮮で多様な話題、直近のフランス情報などを歓迎します。誌面の都合でご相談のうえ、表現を変えさせていただくことがあります。Mon Nara 2023 年 2 月号は **1 月 30 日**が原稿締切日です。
- ◆ 会員のみなさまで「**Mon Nara**」（2 月、6 月、10 月発行）又は「**Mon Nara 通信**」（4 月、8 月、12 月発行）に**チラシ同封を希望される方は**、1）内容がフランスに関わるもの、2）本人または代理人が発送作業に参加、の二つの条件を満たせば同封可能ですので、下記事務局までお問い合わせ下さい。

Mon Nara 2022 年 10 月号 numéro 300

奈良日仏協会 Association Franco-Japonaise de Nara

HP : <http://www.afjn.jp> E-mail : nara.afj@gmail.com FAX : 0742-62-1741

〒630-8226 奈良市小西町 19 マリアテラスビル 2F 野菜ダイニング菜宴[郵便物のみ] 発行責任者：三野博司